やっとかめ文化祭

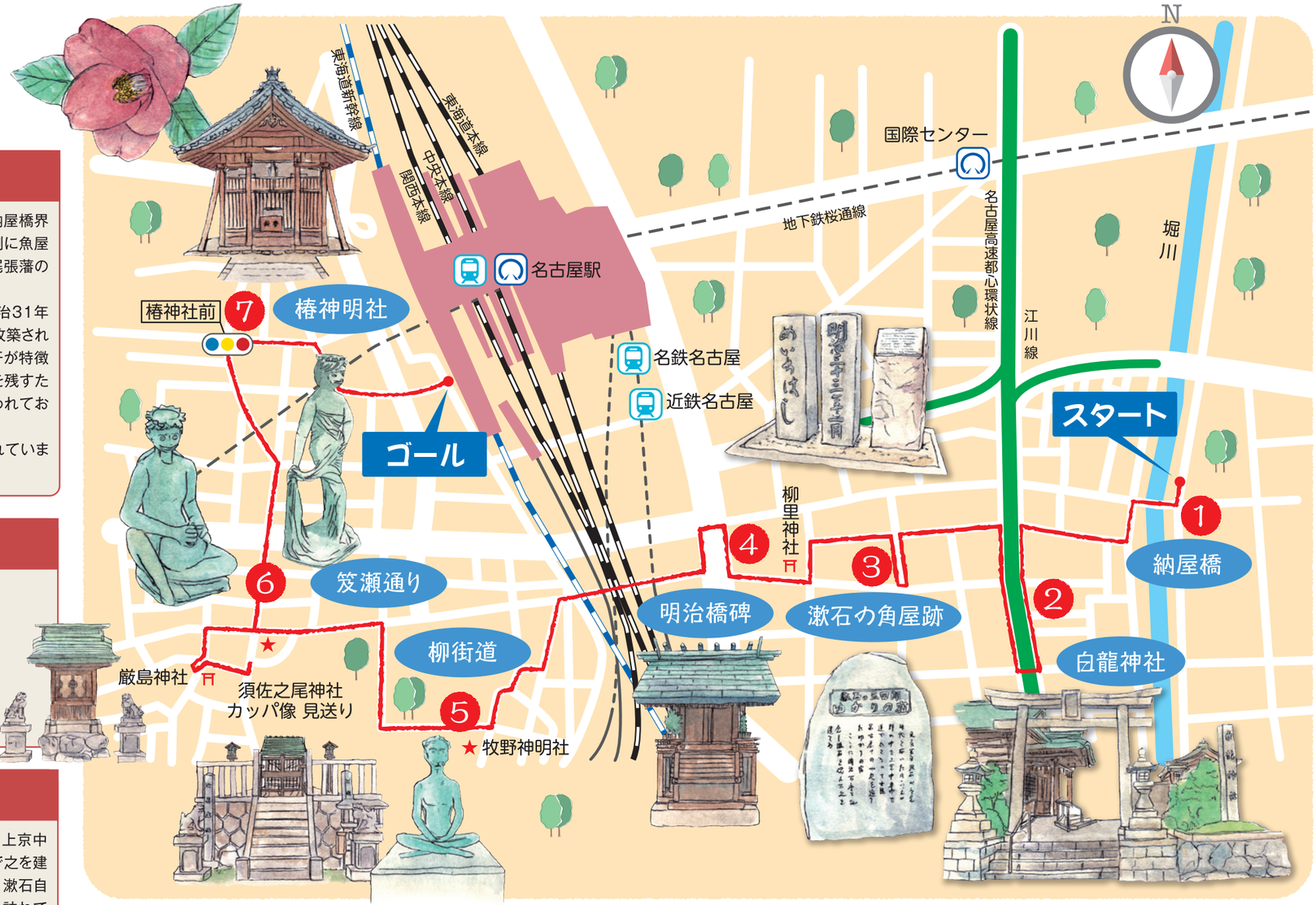
歴史まち歩き

26 柳街道と河童伝説

【旧加藤商会ビル▶名古屋駅西口】

城下町を抜けて河童伝説の地へ、芭蕉涙の別れ道

名古屋城から佐屋街道への近道としてつくられた柳街道。当時は田畑の中を行く裏道的街道で商売の道でもあります。元禄7年（1694年）には、松尾芭蕉も門弟とこの道を歩き、それが最後の別れとなりました。納屋橋から柳街道を西へ、笈瀬通りには河童伝説が残っており、かっぱ商店街では河童像が出迎えてくれます。



① 納屋橋

慶長15年（1610年）の堀川掘削とともに架けられた「堀川七橋」のひとつです。橋が架けられた当時の納屋橋界隈は名古屋城下の南端にあたり、西の烏森と町を結ぶ柳街道が走っていました。名称の由来は、橋の西側に魚屋（なや）、または納屋が多くあり、そこからつけられた地名の納屋町から採られたという説と、橋の南東に尾張藩の米蔵が多くあったことからつけられたとする説の2つがあります。

明治19年（1886年）に広小路通が名古屋駅前まで延伸された事とともに鉄骨製の橋に改修され、明治31年（1898年）からは名古屋市電栄町線が橋上を走るようになりました。現在の橋は大正10年（1921年）に改築された橋をベースに、昭和56年（1981年）に架けかえられたもので、中央部にテラスを持つ青銅鋳鉄の欄干が特徴のアーチ橋となっています。橋の下に取り付けられたアーチは無くても問題はありませんが、前代の面影を残すために飾りとして残されました。アーチとともに外観上の特徴である欄干は前代の橋のものがそのまま使われており、堀川開削を行ったとされる福島正則にちなみ福島家の家紋が施されています。

読みは一般的に「なやばし」とされますが、上流側のアーチには濁点を取った「なやはし」の文字が記されています。なお、納屋橋は平成元年（1989年）には名古屋市の都市景観重要建築物等に指定されています。

② 白龍神社

社伝では、慶長8年（1603年）、この地域は古くは国広井郷と呼ばれ、南北に流れる清流の江川がありました（現在は地下流）。その川に架かる橋（柳橋）の辺りの村に熱病が流行ります。しかし、「此の美しき良き所に大神をお祀りすれば、萬民の苦疫を救い、幸をたれ給う。」とのご神示が下りました。

はじめは、江川の傍にある柳の木の下に祠を建て、人々が崇め拝むようになります。その後、柳の寿命は終え、当時近くそびえる、いちょうの木へ大神様が移られ、引き続き御神木として、人々の崇敬が広まり、更なる大神様の御神徳が現わされ、いつの頃からか二柱お神を総して「白龍様」「白龍さん」と親しまれるようになりました。

③ 漱石『三四郎』泊の角屋跡

漱石の小説『三四郎』ゆかりの宿の石碑には、〈文豪夏目漱石が青春時代を描いた作品「三四郎」の中で、上京中車中で道連れとなって女性と名古屋での一夜を過したゆかりの宿。ここに明治百年を記念し漱石を偲んで之を建てる。〉と記されています。「三四郎」とは1908年（明治41年）から朝日新聞に連載されていた長編小説。漱石自身の青春時代をモデルにしているといわれているそうです。今から100年程前、若かりし漱石がこの地を訪ねていたということになります。すでに前途洋洋たる将来を約束されたかのように思っていた主人公が、いきなり自分の小ささに気づかされる場面。当時の名古屋という町は、漱石先生の目にはどう映っていたのでしょう。

④ 明治橋碑

かつて名古屋方面から中村遊廓へ向かう街道沿いにあったという明治橋。明治33年（1900年）に完成して、昭和12年（1937年）に姿を消しました。現在は名鉄名古屋駅前の笹島交差点角に標柱のみが立っています。目立たない場所にあるので、通行人もほとんど気づきません。この橋は川に架かっていたのではなく、道路をまたぐ陸橋になっていました。標柱は石造りですが、橋の部分は木製だったといいます。

大正12年（1923年）に中村遊廓ができた当時は、この陸橋から中村方面を眺めるとネオンが見えたといいます。笹島方面から明治橋を渡ると、たもとから名古屋市内初の乗合バスの明治橋～中村遊廓間だったというから相当な賑わいだったと思われます。やがて鉄道が高架になり、明治橋はその役目を終えました。

⑤ 柳街道

納屋橋から西に向かい笈瀬川を越え佐屋街道へつながる柳街道。数年前までは、古い民家も残っていましたが、現在は再開発が進み町並みが一変しています。ただし要所で昔の雰囲気を感じることができるので、柳街道から少し寄り道をして牧野神明社へ。村中に疫病が流行し、陰陽師が占ったところ藤の木の祟りであり、酒を醸して神に献上すれば癒るとのことで、お伊勢川の水で甘酒を造り神に献じ、たちまち疫病が無くなったことで、現在まで神事として行われています。

⑥ かっぱ伝説笈瀬通り

「わしはおいせ川のカッパ太郎だ。川岸にはお宮の森がある。何十本もの大椿が繁っているので椿の森とよんでいる。おいせ川は子どもの天国だ。大勢の子どもが泳いでいる。わしも泳ぎがうまい。それに誰にも負けない力持ちさ。一番得意は男の子に化けることだ…。」という碑とともに、かっぱのモニュメントが商店街の北側に2体、南側に1体飾られる笈瀬本通商店街。現在は「かっぱ商店街」の愛称で振興をはかっています。力自慢で男の子に化けるのが得意なカッパの話はこのほかにも川で溺れている子供を助けて「人助けカッパ」と呼ばれる伝説も伝わっています。

⑦ 椿神明社と周辺

名古屋駅西エリアは専門学校などの教育施設、サブカルチャーの店舗、多国籍な飲食店が多く立地しており、東エリアとは異質な賑わいと活力のある地区となっています。そんな場所に椿神明社があります。

境内には伊勢神宮の張り紙などがあり、お伊勢さんとのつながりを感じることができます。椿神明社は伊勢神宮の御神領地で、お伊勢川と名づけられた川がやがて笈瀬川となり、内宮外宮ともにお招きし、伊勢神宮の外宮にみたてられた社で、豊宇気比売命（トヨウケヒメノミコト）を祀っています。椿の多いことから“椿神明社”と呼ばれるようになりました。

〈注意事項〉この地図は「歴史まち歩き」の資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴でご参加ください。車などに十分注意し、各自で責任をもって行動してください。住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。●お問い合わせ：（公財）名古屋観光コンベンションビューロー　TEL 052-202-1143（この情報は平成26年11月現在のものです。）